2013年09月02日 中日新聞 朝刊 19頁

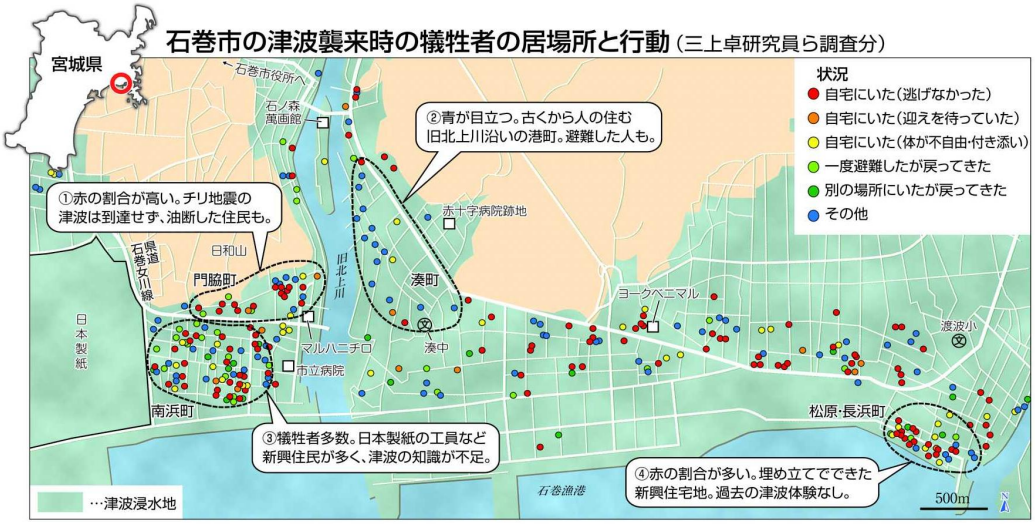
薄い危機感 家族を救助

地図上に行動はっきり

石巻調査

東日本大震災の調査や報道は、生存者がいかに津波から逃げ延びたかというテーマが中心になってきた。宮城県石巻市の犠牲者の行動を調べ続けている東濃地震科学研究所（岐阜県瑞浪市）の三上卓研究員(㊟)は「亡くなった人の行動を知らなければ、真の津波対策は成り立たない」と力説する。近い将来起きるといわれる南海トラフ巨大地震に向け、私たちは犠牲者から何を「学ぶ」ことができるのか。（相坂穆）

石巻市の津波襲来時の犠牲者の居場所と行動（三上卓研究員ら調査分）



南端にあたる石巻市。七・六㍍強の津波が襲い、市町村別で最多の三千八百十九人（昨年三月段階）が犠牲となった。

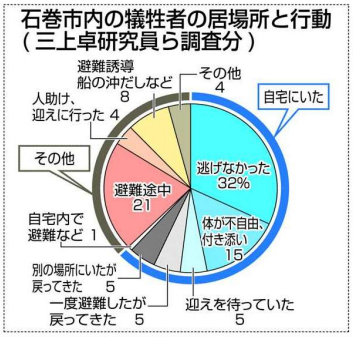
三上研究員のチームは、東北大の今村文彦教授らが結成した津波避難危機感の薄さをうかがわせる証言があった。一九六〇年のチリ地震津波で浸水しなかった県道石巻女川線より北部の門脇町では、「津波がこ」まで来るはずがない」と油断した例もあった。

逃げなかった理由では「体が不自由、付き添いが必要」も多い。「老夫婦のどちらかが寝たきり

リアス式の三陸海岸のた人は63％。理由は「逃げなかった」が半数を超えた。なぜ逃げなかったのか。目撃者によると、「地震直後に家から顔を出したが、すぐに引っ込んだ」「家の片付けをしていた」など、津波への合同調査団に参加。石巻市内の犠牲者の住所を聞き、二〇一一年十一月から仮設住宅でアンケート近隣の生存者から目撃情報を集めている。これまでに市内の犠牲者の二割を超える八百六人の情報が集まった。

分析の結果、自宅にい

石巻市内の犠牲者の居場所と行動（三上卓研究員ら調査分）



新興住宅地 津波未体験 地域で特徴も

津波で水没した宮城県石巻市の市街地＝2011年3月12日午前、宮城県石巻市で

で、つれ合いの体力では、脚、南浜町など各地を避難させられず、諦めて一律ではないことが明確いた」という証言があった。「一度避難したが、戻ってきた」「別の場所にいたが、戻ってきた」という理由も、家族を気遣って自宅に戻った人が多いとみられる。

また、自宅以外で被災した人で多かったのは「避難している途中」で、全体の21％を占め避難した「迎えを待って」てから避難した「一車の渋滞などで時間がかかった」と、さまざまな理由が考えられる。

三上研究員らは、これら犠牲者の場所や行動を地形などのデータと照合し、避難対策のヒント以上の家屋が全壊した門

になった。

かつてチリ津波が到達しなかった地図①の地域は、自宅にとどまった人が目立つ。②の地域は、自宅以外で被災取ったが、逃げる速度が遅く高台などに着けなかった可能性がある。③と④はいずれも海岸に近い地域だが、自宅に残って亡くなった人が多い。新興住宅街で、津波の体験や知識が不足していた影響のようだ。

調査は今後も続け、各地の防災訓練の実施状況や地形などのデータと照合し、避難対策の九割六つに分類。津波で九割を探っていく。

目撃証言から教訓導く

東濃地震科学研究所

三上卓研究員に聞く

三上卓研究員のチームは被災地で二年近く丹念に調査を続け、今も犠牲者についての証言を集めている。学界では珍しい調査方法について、三上研究員にその意義を聞いた。

―なぜ犠牲者の調査を？

東日本大震災では二万人近い住民が津波から逃げ遅れて命を落としたが、国土交通省や内閣府も犠牲者の行動は見当たらない状況で当然、亡くなった本人から話を聞くことはできない。そこで、目撃証言を集めることにした。

学界では、第三者証言の正確性を疑問視する声も少なくなかった。実際、一人の犠牲者に対し異なった情報が寄せられるケースもあったが、内容を吟味して推測した。「自宅にいた」と「避難していたのを見かけた」という証言があった場合は「自宅にいて、その後、避難途中で被災」と判断した。他に方法は見当たらない状況でこで見かけた」「何を最善を尽くしてデータを得たつもりだ。

―「犠牲になったのは、逃げなかった本人の責任」となりかねない。

学界では、第三者証言の正確性を疑問視する声も少なくなかった。実際、一人の犠牲者に対し異なった情報が寄せられるケースもあったが、内容を吟味して推測した。「自宅にいた」と「避難していたのを見かけた」という証言があった場合は「自宅にいて、その後、避難途中で被災」と判断した。他に方法から話を聞くことはできない。そこで、目撃証言を集めることにした。

―「犠牲になったのは、逃げなかった本人の責任」となりかねない。

個人の責任追及ではなく、今後の防災対策に向け原因を知り、教訓を得ることが目的。われわれの想像以上に、多くの被災者が近隣の知人が亡くなった状況を知っていて、いう証言があった場合、「自宅にいて、その後、避難途中で被災」と判断した。他に方法

聞いた。

―各被災者、各地域で避難行動が一律ではないと分かった。

とはいえ、分析は始まったばかりだ。町内会の組織力や防災訓練の内容、避難路などの理由を重ね合わせて考えるべき。南海トラフ地震など次なる災害で被害を減らすことに、つながると信じている。

出すのがつらい」という人もいて、その場合は強制しなかった。

―各被災者、各地域で避難行動が一律ではないと分かった。

個人の責任追及ではなく、今後の防災対策に向け原因を知り、教訓を得ることが目的。われわれの想像以上に、多くの被災者が近隣の知人が亡くなった状況を知っていて、いう証言があった場合、「自宅にいて、その後、避難途中で被災」と判断した。他に方法

しく話してくれた。

傷ついた心に土足で踏み入ることのないよう、感情を抑え、「と」いる。

次回は16日に掲載します。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています